仮面の騎士（ハイド・ナイト）

バカ夜空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面の騎士（ハイド・ナイト）

【Ｎコード】
Ｎ３６２０Ｙ

【作者名】
バカ夜空

【あらすじ】
銃、剣、刀、その他もろもろの武器を習う文武学校。
そこに通う表の主人公は最低ランクのＤランクだが、裏では銃の整備士（ガンスミス）をやっていて仕事は少ないがそれなりの成果を出していた。
主人公と学校生徒達などのバトル？　ラブ？　コメディ？　ものです！

『昔話（レジェンド）』

昨年の事件の一つにこう言う話がある。

一つ、そこは一般市民が普段はほとんど訪れない小さな村である。

一つ、野獣（モンスター）が出やすい非常に危険な地域である。

これらを充たしていた村で、野獣（モンスター）に捕らえられた中学生の女の子を助けようと村の人たちが戦っていると、どこからともなく現れた仮面をつけた騎士が参戦してくれたという話だ。

それを見たものは言った。

それは野獣にさえ恐れず立ち向かう勇気があったと。

それと一緒に戦ったものは言った。

それは剣を使い銃をも使い素手でも戦える武の天才だと。

それに助けられたものは言った。

それは物語に出てくる騎士様のように強くかっこいいと。

子供に読み聞かせる絵本にもされた『仮面の騎士（ハイド・ナイト）』と呼ばれる謎の仮面男のお話だ。

その正体は今もまだ謎であるが……。

＊＊＊

「……き……さ……」
「……きなさい……そら」
誰かが俺の名前を呼んでる。眠たいんだ、静かにしてくれよ。
「起きなさいよそら！」
うるさい声でたたき起こされた場所。そこはいつものベッドの上だった。
窓から明るい光が入ってきていて、起きたばかりの俺の目にはその光は拷問のように辛い。
いつもの女の子が起こしてくれたようだが、簡単には目を開けられないのでその子を見ることができない。
まあ、見えなくても声でわかるんだけど。
「お休み、夏帆」
起こしてくれた女の子――笹倉夏帆（ささくらかほ）におはようではなくお休みと告げる。
夏帆とは幼稚園が一緒で親の中も良かったのでいつも一緒に遊んでいた。世間一般で幼馴染みと言うやつだ。
普通幼馴染みでも朝起こしに来るなんて漫画のヒロインくらいだろう。
しかし俺の両親が事故で亡くなっていて、家に誰もいない。
今は妹と二人暮らしをしているが俺も妹も一度寝ると目覚まし時計程度では起きない。
それでいつも夏帆に起こしに来てもらっている。でも今日は眠いから起こさないでほしかった。
「お休みなさい。……って違うでしょ！　起きなさいよ！！」
一人でノリつっこみしてるなって思っていたら、腹を割るような勢いでかかと落としをしてきた。確かこれは俺の母さん直伝の技だ。
流石に俺にはしなかったけど母さんが父さんによくやってたのを覚えている。……よく耐えてたな、父さん。これ結構痛いぞ。
「起きるから殺さないでくれ。マジで死にそう」

痛む腹を抑えながらゆっくりと立ち上がる。あー、鳩尾に入ってかなり痛い。
「あんたはいちいち大袈裟なのよ」
腹にかかと落としをした張本人が逆ギレしてきた。そんなことしなかったら大袈裟なリアクションもとらないのに。
「自分の朝ごはん作りすぎて余っちゃったから、机の上に置いといたわよ。……ち、違うわよ！　ホントに作りすぎただけなんだから！！」
何故か最後はキレ気味で言ってきた。俺は何も言ってないのになんで怒ってるんだろう？　女の子は不思議だな。
まあ、ここまではちょっと仲良し（？）な幼馴染みの会話に見えるだろ？　ここまでは世間一般なんだけど……、
とそこでドアに手をかけた夏帆が振り返って言った。
「あっ、そうだ。この前〈ワルサーＰ３８〉を現地購入してきて、今は倉庫に入ってあるから後で整備しといてくれる？」
そう、何を隠そう俺は銃の整備士で文武学校の戦闘生だ。
銃の整備士は父さんがそうだったから継いだだけ。まあ、多少技術がいいだけだ。
戦闘生は、その名の通り戦う生徒で色々な科目があり、俺はその中の銃刀科に所属している。
〈ワルサーＰ３８〉はドイツの自動式拳銃で、古いからあまり出回らないが現地購入するほどの品でもないんだけど……まあ、整備程度ならすぐ終わるし学校に行く前にパパッとやってしまおう。
そうして俺がベッドから立ち上がった瞬間――ぐうぅぅぅ。
「……まずは朝ごはんを食べよう」
お腹がＳＯＳを出してきたので朝食をとるためにドアを開けてリビングへ向かった。

『整備（メンテナンス）』

早々に食べ終わった俺は先ほど頼まれた銃の整備（メンテナンス）をしていたんだが、

「かなり古いな……」

銃床（レシーバー）にはひびが入っているし、引金（トリガー）も欠けてるから取り替えないと使いにくいだろう。

それらのことからこれが何十年も使い込まれたと見える。

それにしても……夏帆はどこでこれを手に入れたんだろう？

現地購入って言ってたから新品じゃないことはわかってたけど、ここまで古いものはそうそうどこにでも置いてあるとは思えない。

「後で聞けばいいか」

頭を切り替えて銃床（レシーバー）と引金（トリガー）を直していると、俺がいるガレージのような倉庫の入り口から、夏帆に「学校に行くわよ」と声をかけられた。

「もうそんな時間か」

俺は近くにあった時計を見た。その針は確かに『8』を指している。

授業は八時四十分からで学校までは三十分かかる。そろそろ出た方がいいだろう。

「うん、そろそろ行こっか」

「これもちゃんと持って行きなさいよ」

夏帆の言葉と一緒に投げられたのは俺が愛用している刀の〈蒼桜〉と銃の〈グランパレット〉だ。

蒼桜は俺が小さい頃に刀鍛冶（ブラックスミス）だった母さんが俺に造ってくれた唯一の刀。名前は、造ったとき刀に反射した桜が蒼く見えたかららしい。

ほとんど銃を使うから刀はあんまり使わないんだけどね。

ちなみに母さんは病弱で、親父が教えてくれなかったけどどっか

の外国から、緑の多いこのグランプレインに移ってきたそうだ。しかしその母さんもその刀を造った翌年に病気で亡くなった。
葬式にき来ていた人々は刀鍛冶としての才能がずば抜けていた母さんを「惜しい人を亡くした」と口々に言っていた。
……母さんの話はあまり好きじゃないんだけど。
話を変えて……銃のグランパレットは父さんが使っていたちょっと古い自動拳銃（オートマチック）で、回転式拳銃とは違い発射の反動で自動的に次弾が装填される。
だから俺や父さんみたいな早撃ちには使いやすい代物だ。
それに父さんから譲り受けてからちょっと改造して、一度で弾を十六発撃てるようにした。一回の依頼（クエスト）を少ない弾薬でクリアすることができるので楽だ。
「お兄ちゃん～、置いていくよー？」
倉庫の入り口――夏帆のいる辺りから俺の妹の声が聞こえる。きちんと起きれたんだな。……いや、起こしてもらったのか。
遅刻する気はさらさらないので俺は倉庫から出た。
「おはよう、セラ」
ぎりぎりまで寝ていたのか、まだ眠そうな顔で欠伸をしている。
「髪の毛がはねてるぞ」
「え！？　どこ？　どこ？」
慌てて髪の毛を触りだした。その、慌ててる姿は……我が妹ながら可愛いな。まるで俺と血が繋がってないみたいだ。
「セラちゃんをからかわないの」
夏帆に頭を叩かれたので反省。結構痛かった。
セラは夏帆に「はねてないよ」と言われると「むぅ～……お兄ちゃんのいじわるぅ」と頬を膨らませて怒ってきた。
気をつけろ。それは一部のマニアなら瞬殺されそうな言い方だぞ。いや、意外に使えるか？
「妹をエロい目で見るな！」
「うわっ！！　危ねえ！」

夏帆の回転蹴りをぎりぎりでかわす。
今のはマジで危なかった。避けなければ顔面コースだ。
「次エロい目でちゃんを見たら確実に当てるからね！」
「そんな目で見てねえよ！」
俺も妹に発情する気は全くねえよ。
「二人ともそろそろ出ないと遅刻しちゃうよ？　喧嘩の続きなら後でしてね」
が歩き出したので俺と夏帆は一旦喧嘩を止め、後ろに続いた。
普通なら電車かバス通学なのだが、俺とセラは金がないので必然的に歩いて行くことになる。
夏帆も最初は文句ばかり言ってたけど、いつも俺達に合わせて歩いて通学してくれている。行動とは裏腹に優しいやつなのだ。

『実力（アビリティ）』

いつもよりちょっと遅めに出てしまったけど、この時間なら……ぎりぎり間に合うだろう。

「そういや夏帆。風の噂で聞いたんだが、Ａランクになったんだって？　凄いじゃん！」

「え！？　そうなんですか？」

「なんとかってやつも結構あったけどね。それより。あんたに言われると凄く腹が立つんだけど」

「仕方ないですよ夏帆さん。お兄ちゃんは普段はちゃらんぽらんでダメダメにみえる唐変木ですけど、依頼（クエスト）とか、ちゃんとしないといけないところはきっちりしてますから」

後ろだけ聞くといいこと言ってるみたいだけど、最初の方は完全に暴言だよね？

まぁ、実際そうだしね。

「ほんとなんであんたなんかがＳランクであたしがＡランクなのよ！　絶対あんたより真面目に授業を受けてるし、依頼の達成度だって負けてないのに……」

「それは実力がＳランク並みってことだろ？　本当は全然違うよ。でも、なんでだろ？　やっぱりこの実力？」

「殴られたいのかな、あんたは」

「冗談です」

目が本気だ。絶対殴ってくる気だったな。

「でも実際夏帆さんとお兄ちゃんってどっちが強いの？」

「私の方が強いわね」

「夏帆だろうな」

俺と夏帆両方が即効で同時に言う。

こいつ自信満々に言いやがって……。

しかし、夏帆に俺が勝てない理由はある。

「な、なんでですか？」
「こいつへたれだから」
「断じて違う。勝手に捏造するな」
へたれでも実力は夏帆より上の、しかも銃刀科でSランク並なんだぞ。戦闘で負けるはずがない。
さっき言ったように、俺達の通っている高校には結構科目があるんだけど、その中で一番Sランクが少ないのが俺の所属している銃刀科なのだ。
「このバカは相手が仲間だと銃を使わないのよ」
「俺は絶対仲間に銃口を向けないだけだ」
「お兄ちゃんかっこいいね」
そう言われると悪い気はしないな。
「バカなだけよ」
そう言われると心が痛いな。
仲間に銃を使わなくても、負けることはないのだが、
「力を押さえないと、めんどくさいことになるからな」
実を言うと、俺の学校内でのランクは最低ランクのDになっている。実際、実力は最高ランクのSなのだが、それは夏帆とセラと文武学校の校長しか知らないことだ。
隠しているのはただSランクの依頼（クエスト）が嫌なのと、いちいち絡まれるのが嫌というどうでもいい理由。
話は戻るが、そのSランクの実力を隠すために、俺は校内ではあまり戦わないようにしている。
もし誰かに見られたりとか、戦ったやつが広めたら、Sランクだとばれてしまう。
だから俺が夏帆に勝てないということだ。
「お兄ちゃんも苦労してるんだね」
「言うほどでもねえけどな」
そう言い、校門を通過して、立ち止まる。
「私はこっちだから。またね、夏帆さん、お兄ちゃん」

俺は「おう」と単調な返事をして再び歩き出した。
高校は中学と同じ敷地にあるが俺達の家からは中学の方が近い。早足で行かないと遅れるかも。
夏帆も同じことを思ったのか、走り出したので俺もついていくように走った。しかし残念なことに、それと同時にチャイムが鳴り響く。
「夏帆、先に行ってるぞ！」
それまで後ろをついていくように階段を駆け上がっていた俺なのだが、時間が時間なので夏帆には悪いが先に行かせてもらおう。
今は一階と二階の間にある階段にいるので、二階につくと俺は窓から飛び出した。
このままでは落ちるので、ワイヤーを伸ばし、先に取り付けてあるフックを四階の窓に引っ掛ける。
後は壁を力いっぱい蹴り飛ばし、それと同時にワイヤーを回収すれば四階まで登れる。
左右を眺め、誰もこちらを見ていないか確認して、何事もなかったかのように教室に入る。ぎりぎり間に合った。

『要請（チャレンジ）』

俺が席につくとチャイムが鳴り終わる。俺が開けておいたドアから送れて夏帆が入ってきた。
「あんた私を置いていったわね！！」
「仕方ないだろ？　間に合いそうになかったんだ」
「だ、誰のせいで遅れたと思ってるのかな？」
「……俺に整備（メンテナンス）を頼んだ夏帆のせい？」
「殺してあげる」
そう言い、スカートの中から拳銃――対人連銃（メアトル・カルチャー）を取り出す。これは火力は少々弱いが反動がかなり少なく女子に人気の自動拳銃だ。
撃たれると、火力が弱いことを差し引いてもかなり痛いことにかわりはない。
あの乱暴な夏帆でも流石に教室では……って目が本気だ！！
夏帆が対人連銃の引き金を引こうとして、
「おい、笹倉。銃の使用を許可してるとはいえここは教室で、しかも朝のＨＲ中なんだぞ？　発砲するなら他所でやってくれ」
「う……すいません」
夏帆は周りを見て恥ずかしくなったのか頬を赤らめた。
その後俺をきつく睨んで、対人連銃をホルダーになおし席に戻った。
……危なかった。先生が止めなければ確実に俺を狙って撃ってたな、あいつ。
佐野先生は夏帆がおとなしく席に座ったのを見てちょっと荒い口調で、
「さてと……じゃあ、朝のＨＲを始めるよ。まずはこれを見ろ」
黒板にバンッと叩きつけたのは、一枚の紙切れだった。
これは俺の一番嫌いなタイプだ。俺は窓際の一番後ろの席なのでよく見えないが佐野先生が黒板に紙を貼りつけるときは大抵これだ。

「このクラスに討伐要請（バトルチャレンジ）がきてる。校長の押し印付きでな」
佐野先生が白紙の紙をみんなに配り始める。
――討伐要請（バトルチャレンジ）。
これを話すには依頼（クエスト）と要請（チャレンジ）の違いを知ってもらわなければならない。
通常、依頼（クエスト）とは放課後に単位が欲しくて個々が自分にあった依頼を受け、それをこなすと報酬と単位が貰えるという簡単なものだ。
しかし、要請（チャレンジ）は依頼とはいくつか違う。
要請はクラスで選ばれた六人がモンスターや犯罪者を討伐、もしくは逮捕するものである。
依頼と違い、自分がその敵を倒せるランクでなくても受けることができるが、その分難しかったり強かったりするので病院送り――最悪の場合死ぬこともある。
それに校長の押し印ありということはAランク以上の要請になるのだ。
俺は校内で実力を出したことはないが、先生達は知っている。それにこのクラスにAランク以上は夏帆を含めた三人しかいない。俺は策士としても知られているので、
「多数決の結果、Aランク春日谷陽菜（かすがやひな）、茅野美奈（かやのみな）、笹倉夏帆。次にBランク新庄明希（しんじょうあき）、ジェシカ・ストロープ。最後に……Dランク中川そら」
こんな感じにいつも選ばれるんだよなー、俺。要請にDランクで選ばれる戦闘生は全クラスの中で俺ぐらいだろう。それぐらい低ランクのやつは選ばれない。
「また中川か……。Dランクのくせによく選ばれるな、お前」
「そうですね佐野先生。なぜ俺は選ばれるんでしょうね」
「それはこのクラスがバカだからじゃないか？　とりあえず、今呼ばれた生徒は今からすぐ準備をして行くように」
佐野先生は今呼んだ生徒たちの顔を見て「じゃあ、解散だ」と黒板に貼り付けた紙を投げた。

それを取ったのは『高速の剣獣（クイック・ユニコーン）』という二つ名を持ち今回のメンバーにも選ばれた、刀銃科の茅野美奈さんだ。
赤――いや、緋色に近い髪の毛を揺らしながら紙を取った彼女は、二つ名通り高速だった。
大抵Ａランク以上には二つ名がつく。夏帆も二つ名をもらったとか言ってた。
それにしても……人間で、しかも女の子に獣は酷いと思う。
「お前も早く行け」
佐野先生に言われ、辺りを見回すと選ばれた生徒はみんないなくなっていた。
まずい。出遅れたな。
俺は急いで鞄に入れておいたティスタＰ８２と言う小型拳銃を手にとり、紙に書いてあった集合場所――校門に向かった。

『編成（ダイバージョン）』

一通り用事を済ませて校門に行くと、既に茅野さんと茅野さんの戦妹弟（せんまいてい）であろう男が待機していた。

――――戦妹弟。

中高一貫の文武学校では、まだ依頼などを受けられない中学生の育成として、高校生が中学生と二人一組でチームを組むのだ。

人数が足りない場合は三人一組になる。俺も三人一組なのだが、一人は今日休みだそうだ。

高校生は男女比率が同じくらい（若干女子が多い）なのでいいのだが、中学生は圧倒的に女子が多いのだ。

なぜ女子が多いかと言うと、男子は姉妹校の柊学校（ひいらぎ）に推薦入学で入ってしまうから。

なのでほとんどの高校生が中学生の女子と組むことになる。

それは別にいいのだが、

「先輩〜！　先輩先輩先輩〜！！　ずっと会いたかったんですよ！」

こんな感じになる場合もあるんだよな。誰だ、こんないらん制度作ったやつは。

「先輩！　私寂しかったんですよ？　先輩がDランクの依頼（クエスト）しかうけないから、ほとんど一緒にいられないし」

「俺の知ったことじゃない」

先輩先輩うるさい彼女は、俺が戦妹弟を組んでいる中学二年生の梅宮桃（うめみやもも）だ。

桃は依頼ができない中学レベルでBランク。俺より軽く実績はいい。

それにこいつは俺の本気を見たことがある。

俺が高一の頃、Dランクの軽い討伐依頼に行ったとき、たまたま会ってしまったのだ。中一だった頃の桃に。

そのとき、急いでいた俺は本気でモンスターを討伐した。それを見られてから、いつもいつも「戦妹弟を組んでください！！」と言い寄られて、仕方なく組んだのだ。
実力的には申し分ないが戦闘以外はべたべたしてくるので、全体的にはかなり微妙な子だ。
まあ、慕ってくれるのは嬉しい。
「落ち着け、桃」
未だ先輩先輩言ってくる桃を黙らせていると、残りのメンバーが来て、全員揃った。
それから軽く自己紹介をして、目的地へと向かった。
ちなみに選ばれたメンバーと戦妹弟は、春日谷さんと宮城吹雪（みやしろ ふぶき）さん、茅野さんとその弟の茅野陸（りく）君、夏帆と俺の妹のセラ、新庄さんの戦妹弟は休みだそうで、ストロープさんと楸玲奈（ひさぎれな）さん、そして俺と桃。
……このメンバーなら俺は力を使わなくて大丈夫だろう。
そんな気軽な気持ちで目的地に向かった。

「遅いぞ、中川そら」
「そうよ。早くきなさいよ」
「茅野さんも夏帆も早すぎるんだ。もうちょっと待ってくれ」
「私のことは茅野、もしくは遥でいいと言ったはずだが？」
「……すいません」
茅野さん……じゃなかった。茅野……と夏帆のスパルタがかなり効く。
俺がちょっとでも遅くなったら、遅いだの早く来いだの言ってくる。夏帆だけに言われる分はまだ大丈夫なのだが茅野が加わって結構辛い。
俺達の会話を聞いていた陽菜が「こ、ここで休憩にしませんか？」

と助かる提案を出してくれた。
ちなみにバス、もしくは電車移動かと思ってたらまさかのランニング。場所がそう遠くないからって理由で。
「ありがとう、陽菜。もうちょっとで死ぬところだった」
「い、いえ、とんでもないです！　私はただ中川君が疲れてそうだなー、って思ってやっただけですから！！」
「それが俺からしたらありがたいことなんだよ」
「そそ、そんなもったいないお言葉を陽菜にかけていただけるなんて……あああ、ありがとうございます！」
俺が一番仲がよくなったのは多分この春日谷陽菜だ。彼女は少し控えめな性格だが、先ほどのように俺を気遣ってくれる優しい性格を持っている。そんな性格このメンバーにはなかなかいないぞ。
「……中川そら。今悪口的なことを考えなかったか？」
「気のせいだ」
茅野はかなり勘が鋭いな。
「……そうだな。中川そらが私を裏切るわけがないな」
「……」
裏切りはしないが俺達の仲はそこま　でよくないと思う。ばれなかったことはラッキーだけど。
「こんなものを拾ったんだけど……姉さんはなにかわかる？」
茅野の弟である陸君が拾ってきたものは……なんだ、これ？　黒く、筒状になっていて少し熱い。
これはまるで……、
「陸君、ちょっと貸してくれる？」
「あっ、はい。わかりました」
俺は陸君から受け取った謎の物体を見る。
確かにこれを扱っていてもきちんと整備しているもの以外ほとんど気づかないだろう。
今では俺のように銃の整備士（ガンスミス）がいるから、自分で整備しているものは限りなく少ない。

もうわかったとおもうが、これは拳銃の銃口――しかもさっきまで使っていたと見える。
しかし、銃口だけしかない。……なにかに切られているみたいだ。
この抉られたような切り口は……まさか野獣（モンスター）！？
「？　どうだ、中川そら」
「これは拳銃の銃口だよ。それにこれの使用者は多分この周辺で襲われている」
「襲われてるの！？　早く助けないと！！」
夏帆の言う通り、早くしないと野獣に傷をつけられるかもしれない。
「みんな一緒に行く方が安全だけど三チームに分けさせてもらうよ。いいかな？」
みんなに賛成を得ようとするが、三チームにする意味がわからないのか、なかなか頷いてはくれず首をかしげている。
「ただ俺以外高校生の個々はみんな弱くない。だから分けたとしても負けることはないだろ？　そして分けた方が捜しやすい。これでいいか？」
俺が事細かに説明する。その意味を最初に理解したのは陽菜だった。
「さ、策士って呼ばれてる中川君が言うからには意味があると思うの。ここでじっとしてるよりはいいんじゃないかな？」
そして一番に――いや、正確には二番に動き出した。
一番の彼女はすでにいなくなっている。『高速の剣獣（クイック・ユニコーン）』の茅野だ。多分考える前に行動したんだろう。
「陽菜が茅野の方向に行ったから、後は二チームに分けよう」
そしてジャンケンをした結果、俺達と新庄さんのチーム、夏帆達とストロープさん達のチームに分かれた。
バランス的には夏帆達に片寄っているが、俺達のチームも俺が本気を出せば負傷者が出ることはないだろう。なるべく本気は出したくないけど。

「これを渡しておくから、敵を見つけたら使ってくれ。大きな音がするからすぐにみんなが駆けつけてくれるはずだ」
夏帆に手渡したのは――ロケット花火だ。時間がなくてこれしか持ってこれなかったのは不覚だけど。
ロケット花火は使い方しだいでは目眩ましにもなるから結構使える代物だ。
そして「解散」と先生の真似をすると、みんな一斉に動き出した。

『救助（レスキュー）』

「なあ、桃、新庄さん」
「なんですか？」
「なんでしょうか？」
「さっきは言わなかったけど、ここ実は「禊の森（ディバイニティ・フォレスト）」って言って、Aランク危険地域に登録されているから戦闘生以外は入れないようになっている森なんだ」
「それがどうしたんですか？」
新庄さんは察しが悪いようだ。今の説明とさっきの銃の話を聞いてなかったのか？
「さっき落ちていた銃口は熱を持っていたから俺達が来るちょっと前まで使われていたんだよ？　つまり戦闘生以外の人間がこの森にいるというわけだ」
「それって違法になるんじゃ……」
「新庄さんの言う通り、危険地域、それにAランクともなれば違法者として最低一年の刑が下ると思う」
しかしそれは知らずに入ってしまった場合の一年というわけで、そこになっている植物や動物の乱用、密売をしていれば五年か六年、長ければ十数年までいくだろう。
「見つけたら……やっぱり報告するんですか？」
「俺はそれが乱用とか密売以外なら、なにも悪いことをしていなかったら報告する気はないよ」
「優しいですね」
「そうか？　だってこの銃口の持ち主は女の子だし」
「女の子？　先輩はなんでわかるんですか？」
俺は仮にも銃の整備士（ガンスミス）なんだ。どれくらい銃を扱ったと思っている。特徴のある銃を見れば大抵それぐらいはわかる。
「まずさっきの銃口だけど」

そう言いながら愛用している銃のグランパレットとポケットに入れておいた銃口を取り出す。
「この銃口はグランパレットより少し小さい。グランパレットは四ミリ口径で、それより小さいものは俺の知る限り二つしかない。それも最近流行りの〈ＲＲＳ４７式〉と〈スクエア８８〉の三ミリ口径だ。その二つは対人連銃より反動が少ないから女性用――大抵が子供の護身用として販売されているんだよ」
「それで女の子がいる、ってわけですね？」
「そう言うことだ。まあ、拾ったって可能性もなくはないけど」
ここは監視カメラがあるわけでも警備がついてるわけでもないので、危ないことを差し引けば一応誰でも入れる。
どっちかと言えば、違法者が銃で戦ったときに落とした可能性の方が高い。
それなら男でも女でも危険になれば女性用の銃を使うだろう。

「誰かーー！！　助けてくださいーー！！」

ふとキーの高い――女の子の声が聞こえた。
銃口の持ち主を捜していた俺達は、まさかと思い声のした方を見た。
案の定、栗色のショートヘアーの髪の毛を揺らしながら、野獣（モンスター）から逃げ回っている女の子がいた。
「早く助けないといけませんねー」
「いや、待て。……桃と新庄さんはみんなを呼んできてくれ。ロケット花火がないからこの場で呼べないんだ」
時間がなかったので一本しか持ってこれなくて、その一本も夏帆達に渡してしまい助けを呼べないのだ。助けを呼ぶために使うのではないが。
「先輩はどうするんですか？」
「俺はあの子を助け出す。それからみんなが来るまで逃げる」

「そんなのそらっちーが危険すぎますー」
「大丈夫だ。銃の扱いには長けてると自覚しているほどだし、一応策士って呼ばれてんだぜ？　作戦もあるし、無謀な挑戦はしねえよ」
「……わかりましたー。私達が戻るまで無理はしないでくださいねー」
「おう、任せとけ」
桃が「早く戻ってきますからね！」と言って、みんなを呼びにいったので、現在進行形で逃げている女の子を助けることに集中する。
その前にまず言っておくが、俺は桃と新庄さんに全くと言っていいほど期待していない。
期待というかそれ以前にこの広い森でばらばらになった二チームをそう簡単に見つけられるとは思えないのだ。
だから行かせる必要はないのだが、俺が二人を行かせたのには理由がある。
まずは彼女を助けてからだな。
桃達に作戦があるって言ったのは二人を行かせるための口実だったので、実際はなにも考えていないのだ。
「きゃっ！！」
作戦を考えていると、彼女が石に躓いたようで前のめりにこけていた。
「考えるより行動、だな！」
俺は彼女が野獣に突進される前に草から飛び込み、彼女の手をとりそのまま横っ飛びして回避した。
「っ！！」
野獣（モンスター）の頭に生えた角が彼女の右足に当たり、少量だが血が滴り落ちている。この程度の傷なら走って逃げられるだろうと思ったが、骨を折っているようでその痛みで気絶してしまったようだ。
「危ない！」
避けられたことに苛立ちを覚えたのか、野獣が彼女の隣りにいる俺に目標を変えてきたので彼女を突き飛ばした。

当然俺は動けないので野獣の突進をもろに受けるという結果になる。俺は吹っ飛ばされた勢いで近くにあった草むらの中に飛び込んだ。

野獣は完全に俺がやられたと思い、怒りの矛先を負傷して気絶している彼女へと向けた。

このままではやばいと思い、俺はあるものを取り出した。……

『騎士（ナイト）』

「みなさんどこにいるんでしょうか？」
「わかりませんねー」
先輩に頼まれてばらばらになった二チームを捜しているんですが、
「どこにいるんですかーー！！」
この広い森でどうやって捜せって言うんですか！！　先輩は絶対わかっていて私達を行かせたはずです！
「落ち着きましょうよーももっちー」
「誰がももっちですか！」
新庄先輩に変なあだ名はつけてほしくありません。……まあ、先輩につけられたら変なあだ名でも……って今はそんなことを考えるんじゃなくて！
「新庄先輩！　やっぱりこんなに広い森であの少数メンバーを捜すのは無理がありますよ！　先輩のもとに戻りませんか！？」
「んー……そうですねー。一度戻って私の〈鉄の処女（アイアンメイデン）〉で敵の足止めをするのもいいですねー」
「〈鉄の処女〉？　なんですかそれは」
「あなたも高校でBランク以上になればわかりますよー」
新庄先輩はフフッと笑うだけでなにを教えてくれない。それは後で別の先輩か誰かに聞けばいいとして、
「とりあえず先輩のもとに戻りましょう！」
先ほど私の案に承諾してくれた新庄先輩は、今は難しい顔をしている。
「どうしたんですか？」
私の質問に新庄先輩は最もな返事をした。
「……私達どこから来ましたかー？」
……ほんとにもうどうしましょう。

ダメだ。殺される。今まではなんとか必死に逃げ回っていたのだがとうとう運が尽きた。
体力の限界か、はたまた疲労のせいか足元にあった石に気づかず前のめりにこけてしまった。
座ったまま顔だけ振り向けるとすぐ近くに私を追っていた野獣がいた。こいつは私を追っていたスピードで私に突進してきている。
誰かに助けを求めようとするが、声がでない。でてくるのは荒い吐息だけ。そもそもこの危険地域に人や私の同種みたいなものがいるわけがない。
もう……ダメ、かな。
そう思った瞬間、私を突き飛ばす影が見えた。
それは人の形をした影だった。しかしその正体を確認する前に足に強烈な痛みを感じ、意識が薄れていく。
ここで倒れるわけにはいかないので意識はかすかに保ったが、身体を動かすことができない。
その時突然私は突き飛ばされる感覚に襲われた。感覚ではない。私を助けた影が突き飛ばしたのだ。
当然なぜ突き飛ばされたのかわからないので講義しようと思ったが、影は矛先を変えた野獣の猛突進によって突き飛ばされてしまった。
野獣の角からは血がぽたぽたと滴り落ちている。
あの影は私を助けて殺されたんだ……。次に殺されるのは私なんだ。
突進してくる野獣を前に、私は目を閉じた。
……。
……。
……。
……あれ？

いくら待っても野獣が私に突進してくるけはいがない。それどころかなんだかさっきより遠ざかった感覚がある。
恐る恐る目を開けた私が見た光景は――、
「だ……誰？」
私の目に映りこんだのは、仮面をつけた人間だった。
野獣は仮面の人間にやられたのか、顔に傷をつけて前方に大きく吹き飛んでいる。
巨体の野獣を蹴り飛ばすか殴り飛ばすかをしたのだ、力がかなり強いということがわかる。
（私を助けに来てくれたのかな？）
そう思わずにはいられない。しかし、それと同時にその人間の着ている服は昔会ったことがある『戦闘生』という種類の人間が着ていたと思い、この野獣を倒しに来たのかもとも思った。
「大丈夫か？」
その仮面の人間は平然と私に話しかけてきた。
声からして多分男だろう。女の声と間違えてもおかしくないキーの高さだけど。
「あ、ありがとうございます。あっ……私が怖くないんですか？」
私は人間の形をしているが、実際『戦闘狼（バトルウルフ）』と呼ばれている野獣なのだ。
理由はわからないが数日前、突然人間の体になってしまった。さらに人間の身体や見た目に狼の耳と尻尾がついているというおかしな身体になったのだ。
「別に怖くないさ。あんな野獣とも平気で戦えるんだし、お前と似たようなやつを俺は知ってる。それよりけがは大丈夫なのか？　頭から血が流れているけど」
指摘されてから頭がズキズキと痛くなる。触れると生暖かくドロッとしたものが手についた。
すぐにそれが血だと分かった。それと同時に彼の後ろに回復した野獣が突進してくるのがわかった。

「危ないです！！」
「大丈夫だよ。……ったく、うるさい野獣だな。ここにいる彼女くらいかわいかったらまだ救いようがあるのに」
「ふぇ！？」
はははっと笑い、その後深いため息をついてゆっくりと立ち上がった。
右腕に巻きつけられた包帯をゆっくりと解いていく。けがでもしていたのかな？　と思ったが、腕の下からでてきたものは、
「紋章……ですか？」
「ああ、見るのは初めてかい？　これはAランクよりのBランク以上の生徒……って言ってもわかんねーかな？　まあ、一部の強いやつが持てる能力だ」
「いえ、一応ありますけど……大きくないですか？」
普通は手首から肘程度なのだが、彼の紋章は手首から肩まで見えている。
「それほど強大で危険な力なんだよ」
こっちを向いて説明してくれているが、野獣は木々をなぎ倒し、確実に近づいている。
彼は私への説明を終えたので再び野獣の方を向く。
「〈喰われて喰らう者（ミミクリィ・ナイト）〉発動」

『騎士（ナイト）』（後書き）

初めまして～。えーと、バカ夜空です♪
初めて読んでくださる方、初めて読まれた方、ありがとうございます！
今回とうとう仮面の騎士が出てくださりましたね♪いやーお疲れ様！
次回も期待せずにお待ちください☆

『終結（コングレッション）』

「はいは～い。ひっさしぶりだね～。能力使用許可認証しま～す」
彼がそう言うと、ポンッと音がして彼の肩辺りに――まるで絵本などに出てくる妖精のような小さい女の子が現れた。
（あれは確か力を使う時に出てくる……）
確か代行体だったはずだ。自身の力によってその効果は違うのだが、種類は力の数だけあるらしい。私は力使えないのでそういったことにはあまり詳しくない。
「第一章の使用許可を取ってくれ」
「りょうか～い。第一章の許可用生け贄、一ついける？」
「今日一日の味覚をやるよ。それで生け贄一ついけるか？」
「だいしょ～ぶだよ。第一章の使用許可がでた」
彼の代行体がパンッと手を叩く。なにかあったのだろうか？　声が小さくて聞こえなかったから代行体と彼の会話が聞き取れなかった。
その音のすぐ後に彼の紋章が薄く輝きだした。
「第一章〈絶句・絶叫の拷問道具（スクレイム・パニッシュ）〉より、第五番〈鉄の処女（アイアンメイデン）〉」

今度は彼の目の前の何もなかった空間からいきなり鉄でできた縦長の箱が現れた。箱というより棺桶に近いそれは、彼の「開き、喰らえ」という合図とともに、ふたが開き、野獣に噛みつくようにして中に閉じ込めた。
「す、凄い……」
彼の攻撃の強さも凄いと思ったが、一番凄いのは展開の速さだ。戦闘狼（バトルウルフ）はこれでも野獣状態ならAランクの上級野獣なので私も野獣の頃は戦闘生と何度も戦ってきた。
そこで今のような技を見たことがあったが、ほとんど展開するの

に時間がかかり簡単にかわすことが出来た。しかし今のを見ているとどうもかわせる気がしない。
「ぐるあぁぁぁぁアアアアアアアアアアアアッッ！！！
完全に箱に入ったので身動きがとれないと思っていたが、野獣はその箱を力で強引に壊して這い出てきた。体には無数の傷があり、結構ダメージを受けていることがわかる。
「これが効かないなら次の技を使おう。今度は第八章と第二章の使用許可を取ってくれ」
「りょうか～い。第八章、第二章ともに生け贄、一ついける？」
「今日一日、嗅覚と触覚を生け贄で両方いけるか？」
「だいじょ～ぶだよ。第八章、第二章ともに使用許可がでた」
今度は二回パンッパンッと手を叩く。するとまた彼の紋章が、さっきより強く輝きだした。

「第八章〈雑音響く薄い鉄（イチュード・ノイズ）〉より、第一番〈重力操作の雑音（グラビティ・ノイズ）〉」

先ほどとは似ているが中身が少し違う言葉とともに、
「堕ちろ」
一言。たった一言だけだったのに野獣の体はまるで地面に吸い寄せられたようにひれ伏した。
私にも少しその技が効いたようで体が重くなる。
「ああ、ごめんね。ちょっとの間だけ我慢してくれるかな？」
「だ、大丈夫……です」
彼は私のために戦ってくれているのだ。やめてくださいなんて言えるわけがない。
「次で決めるからちょっと待っててね」

「第二章〈高速の角獣（クイック・ユニコーン）〉より、第一番〈瞬時加速の噴出口（ジェット・アクレイション）〉」

姿勢を低くしたと思えば、次の瞬間言葉とともに消えた。

いや――移動したのだ。光の速さか、はたまた音の速さか。とりあえず見えないほどもの凄い速さで移動したのだ。野獣の背中の上に。
野獣も気づいていないようで辺りを見回している。
彼は腰の辺りに装着していた二つの拳銃を取り出して野獣の背に押し当てる。
「急所は外してやるよ」
パァンッ、パァンッ！！！
二つの銃声は野獣の痛みによる声をかき消すほど大きくて、音波で木を揺らしていた。ぎりぎり耳を塞いでいたけどそれでも痛い。どうやったらあんな小さい銃であれほど大きな音が出せるんだろうか？
私が疑問に思っていると、彼はまた消えて――高速で私の元に戻ってきた。
「敵は倒したから俺は行くけど……この服のことは誰にも言わないでくれるか？」
「は、はい！」
「後、俺の知り合いに中川空ってやつがいるからそいつの元に行け。わかったか？」
私は「誰ですか？」と問いただそうとしたが、
「大丈夫ですかー？」
その返答は突然現れた女の人によって言葉にできなかった。
「え、あ、はい！　この人に助けられたから大丈夫です！」
「この人ー？　ここにはあなたと私――」
「待ってくださいよ新庄先輩！」
「ももっちーが遅いんですよー？」
「私のせいですか！？」
最初に来た新庄先輩と呼ばれた女の人と後から来たももっちと呼ばれた女の人には彼が見えていないようだ。
「……え！？」

いや、違う。彼がいなくなっているのだ。先ほどまで居た彼は多分だけど突然の二人の来訪者に正体がばれてはいけないのか、また高速で移動してこの場からいなくなったのだろう。
がさがさっと草が揺れる音が聞こえた。
「誰ですかー？」
新庄という名の女の人は草の方向に問いかけた。
口調は穏やかなのに微妙に殺気がでている。本気で警戒しているのだろうか。
「俺だよ、俺」
ふらふらとした足取りで、草の間から最初に私を助けた男の人が現れた。
その男は野獣にやられたのか、お腹を押さえている。そしてそこから少量だが血が垂れている。
「だ、大丈夫ですか、先輩！」
「ああ、俺は大丈夫だけど……その子は大丈夫？」
「あっ！　はい！　ありがとうございます」
「そらっちー、無理はいけないと言ったはずですよー」
そらっち？　そらっち。そら、っち。空、っち！？
「もしかして中川空さんですか？」
「え？　うん、そうだけど？」
私の読みは外れていなかった。この男の人が、仮面の男が言っていた『中川空』なのだ。
確か彼は私に……。
「あの……一ついいですか？」
「ああ、別にいいけど？」
「私を飼ってください！」
「うん、それぐらいなら……え？」

『終結（コングレッション）』（後書き）

カハッ……いやー、疲れました☆
まずは、初めて読んでくださる方、初めて読まれた方、ありがとうございます！
なんか技がいっぱい出てきましたね……。
またそういうの作りますかねー……。
とりあえず、次回も期待せずお待ちください♪

『名前（ネーム）』

沈黙が場を埋め尽くす。あー、空気が重い。
その空気に耐え切れなくなった俺は彼女の目を見て、
「えーと、今なんて言ったかな？」
「私を飼ってください！」
「出来れば聞き違いがよかったよ！」
女の子を飼うのか？　いや、耳と尻尾がついているから中身は野獣か何かなんだろうけど、見た目は女の子。
飼うとかそういう話ではないだろう。
「何でもしますから私の飼い主になってください！」
「その言い方はなんとなくいけない気がするんだけど！？　後誤解を生みそうだからそういう事はあまり言わない方が俺の肩が外れる！！」
「その話を詳しく聞かせてもらおうかな？」
「離してくれ夏帆！　話せばわかるから！　離して話せばわかるから！！」
音に駆けつけた夏帆に右肩を強く握られて悶える俺。
手が！　手が青くなってるから！　いろいろやばいことになりそうだからそろそろ離してくれると嬉しい！
「殴る前に話だけは聞いてあげるわよ」
殴る前に肩を潰そうとしませんでしたか？　強めのスキンシップなんですか？
「私はこの人と仮面……じゃなくて、この人に命を助けられました。ですから身体で返すためにこの人に飼ってほしいんです！」
「か、体で返す……？」
「はい！　もっとも、なにができるかはわかりませんが……」
エロい事を考えてしまったことに少し反省。
「そらをやるのは茅野たちを呼んでからにしましょう」

「やる！？　俺は殺されるのか！？」
「私も笹倉先輩の意見に賛成です」
「桃まで何を言い出すんだ！」
俺の命が危ない！
今すぐ脱出しなければいけないのに身体が動かない。
「置いていかないでください、マスター！」
「誰が誰のマスターだ！！」
さっきまで倒れていたのに必死に俺の足を掴んでくる。
そんな契約をした覚えはない。夏帆たちの視線が痛いので今すぐ離してほしい。
俺たちのやりとりを見ていた夏帆が呆れた様子で俺に近づいてきて右手を振り上げた。
「死亡フラグゲット！！」
「ごはっ！！」
その右手が俺の腹に勢いよく振り下ろされる。
それがちょうどけがをしている場所にクリーンヒット。さっきまで止まっていた血がまた溢れてきたよ！
「とりあえず茅野たちを呼ぶからね。聞いてるの？」
お前のせいで何も言えねえよ。今口を開いたらいろいろ駄目なものが出てきてしまいそうだ。
夏帆は俺が渡していたロケット花火を上に向かせて地面に挿し、持ってきていたのかと疑問に思うライターで火を点けた。
花火はパアンと大きな音をたてて高く飛んでいった。そして木を追い越したぐらいでさっきより大きな音を出して爆発した。
「後は茅野たちが来るまでにあんたを尋問にかけるだけね」
「俺に拒否権は？」
「あるとでも思ってるのかな？」
「……ごめんなさい」
俺の謝罪もむなしく、この後茅野たちが到着するまで口では言えないような酷い目にあわされた。

「失礼しました」
学校に戻ってきた俺達は職員室で報告を済ませ、教室に戻ろうとしていた。
「とりあえず連れてきたのはいいけど、本当に俺の家に来るのか？」
「はい！　嫌と言われても、飼ってくれるまで家の前で待ちます！」
彼女の件については先生がどうにかしてくれるらしいが、ほとんどの確立で俺が育てることになりそうだとも言われた。育てるって……飼うとはまた別だけどそれはそれで酷いと思う。仮にも女の子なんだし。
「忘れていましたけど、名前はなんていうんですかー？」
そういや聞いてなかったな。言われなかったので特に気にしなかったみたいだ。
新庄さんの質問に彼女は呆然とした表情で、
「私は元々野獣だったんですよ？　あるとすれば『戦闘狼（バトルウルフ）』という名前だけです」
「それはかわいそうですねー。そうだー、そらっちーが考えたらどうですかー？」
「それはいいですね！　マスター、私に名前をください！！」
「別にいいけど、どうなってもしらないよ？」
まず狼って何科の動物だっけ？　猫科？　犬科？　……犬科だったはず。
犬ならやっぱりポチとか？　いや、仮にも女の子なんだぜ！？
さすがにポチはないだろ。なら犬子とか？　それも変だろ。犬の鳴き声はわん……、
「わんこでどうだ！？」
名案を思いついたように俺が言うと、
「……あんたのネーミングセンスは同情するほどかわいそうね」

「……私がそらっちーに頼んだからいけなかったんですかー？」
「なんでそんなこと言うんだ！？　かわいいじゃないか、わんこって！」
俺はこれでも本気で考えたんだぞ？　なかなか良い名前だと思ったんだけどな。
「わんこ……ですか？」
「あっ、嫌だった？　普通は嫌だよね。あのバカにもう一回考えさせるわね」
「いえ、いいです！　わんこ……わんこかぁ」
彼女――いや、わんこは目を細めて嬉しそうに尻尾を左右に振っている。気に入ってもらえたんだろうか？　それは何よりだ。
「あ、あの！　……ありがとうございます」
不覚にもわんこの笑顔にドキッとしてしまった。
おい、俺！　なにを考えているんだ！　見た目は女の子だけど野獣なんだぜ？　しっかりしてくれよ、俺！
「あー、そらっちーの頬が赤くなってるー」
「あんた野獣に発情してるの……？」
「違う！　年中頬が赤いだけだ！」
「それはそれで……大丈夫？」
かわいそうなものを見るような目で見てくる夏帆に必死で抗議をする俺は、かなり惨めだ。
「……マスターは私で発情したんですか？　……いいですよ。マスターに初めてを捧げます！」
「おいおいおい！　学校の中で服を脱ぎだすな！　いや、学校の外ならいいって話でもないけど！」
わんこは学校指定の制服を着ているが脱ぐのがかなり早く、上は全て脱いで次にズボンへ手を伸ばす。俺はその手を寸前で抑える。
ちなみに学校指定の制服もここに来てから着せたもの。野獣に襲われていたので特に気にしなかったが、禊の森（ディバイニティ・フォレスト）で会った時は、その、……産まれた時の姿だった。

「離してくださいマスター！　私はマスターに初めてをあげようと思って！」
「大声でそういうのを言うな！　しかも公衆の面前で！」
「そうよ！　そらはホントにやりかねないんだから！」
「おいいいいい！　お前はどっちの味方なんだあ！？」
「この子に決まってるじゃない！」
俺達がギャーギャー騒いでいると校内放送が流れた。
『えーと、二年何組だっけ？　まあ、二年の中川空。とっとと相談室に来い。繰り返す――』
「「「……」」」
佐野先生は本当に教師なんだろうか？　口が悪いし、それ以前に佐野先生は俺のクラスの担任だった気がするんだけど。
自分のクラスの生徒を忘れるなんて……酷いにもほどがある！
そのことを言ってやろうと、わんこの処理を夏帆達に押し付け俺は職員室の隣にある相談室へ向かった。
この時、俺はこの後なにが起こるのか、予想にもしなかった。

『名前（ネーム）』（後書き）

くふー♪いやはや、疲れましたね……。
まずは、いつも読んでくださる方、初めて読まれた方、ありがとうございます☆
今回はワン子の名前が決まってよかったですね……ってよくねえよ！！
ワン子ってなんだよ！かわいそうだろ！
まあ、次回も期待せずお待ちください☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3620y/

仮面の騎士（ハイド・ナイト）

2011年11月27日22時51分発行